
愛を。君を。

雨音未波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛を。君を。

【Zコード】

Z4643C

【作者名】

雨音未波

【あらすじ】

男子校に転校する事になった女の子の物語です。ハチヤメチャな
話で、かつて良い男の子達が沢山出てきますので。よろしくお願ひ
します。

プロローグ（前書き）

これからのお話に多少エロが入るかもしません。そんなにひどくないですが、ご了承下さい。そしてどうか感想くれると有難いです！！

プロローグ

あなたは
⋮

切ない…切ない恋を…

した事がありますか？

幸せを……見つけてください

⋮。

：

「はい？」

「だからね、転校するのよ」

……え……ちよつと待つて、転校つて……はつ？

「ごめんな由^{ヨウ}有、俺達仕事で海外行く事になつてさ、悪いが転校してくれ！」

「ちよつ……意味分かんないし！ならあたしも海外行く！」

「それは駄目だ」

「あなたには日本に居て欲しいのよ、あっち行くといつ帰れるか分からないから。仕事で行くし……寂しいかもしけないけどごめんね」

お母さんはあたしの頬に手を当て、優しく撫でた。
お父さんもあたしの頭に手を乗せて撫でてくれてる。

「そんな事言われても…両親が海外行つて、あたしは転校！？ありえないしつ…！
すつじい嫌なんですけど…！」

「学校にはもう手続きしたから。そこの理事長が俺の親友で、由有の事話したらすぐオーケーしてくれて」

「それつて…まさか帰さん？」

「やうだ。良くじむりうんだぞ？」

「…ねえ…その学校つてさ…まさか…」

「ああ、男子校だ」

「無理でえええすつ………！」

「男子校に転校つて…！」

「何考えてんの！？娘を男子校に放り込むな…！」

「何で男子校に転校しないといけないの…？おかしいでしょ…！」

「仕方ないだろ、だつて昴が…」

親の癖にもじもじすんなつ…！

ちよつとどうしよう…マジで…男子校に転校はやばすぎでしょ…あたし女なのに…！…

「心配しないで由有、男子校でも昴さんが居るんですもの。何かあつたらすぐに昴さんに言つのよ」

「お母さんまで…あたし嫌だよ男子校に転校なんて…、やつてけないよ…」

「大丈夫。あなたならやれるわ。あつ、ちなみに男装して行くのよ

はあああー！！！？？？

男装するのー…？？マジですか？

「大丈夫。あなたなら男装似合つから」

いやいやいや。
嬉しくないから。

「明日学校まで送つてあげるわね。樂したで学校生活送りなさい。
手紙も書くから」

「うう…どうせ…」

あたし男子校に転校しちゃうんだ。しかも男装して…。嫌だよっ…。

「あひちなみさんのお学校には寮があるから、明日から寮生活よ

はつ…寮…？寮…。

危なすぎる感じがするわね…」

「あひちなみさん…あたしこれからどうなんの？」

【1】～男子様登場～

あたし……上原由有は現在、男子校の校門の前に立つて居ます。

名は聖光輝学園。
ひこうけいがくえん

今日からあたしが通う高校……。

「はあ……憂鬱……男子校なんて……」

てか何気この学校豪華だね……。校門でかいし、めっちゃ高級そうなライオンの像がお待ちしてると?

昂さん凄すぎ……。

「……よし、行くか!」

意を決した私は中に足を踏み入れた。

どつかの洋館ですか此所は……いや、校舎だよね?

「…………」

高級す“めい”る……。

あたしが見たのは、めちゃでかい校舎と、広い敷地。
中庭だとと思つけど、それは高原に思えてへるような広さ。

生い茂つた草と木。何千本あるんだろ？

とにかく凄いの一言。

外でこれって…中はビックリするんだろう。

石像たつやせんつて感じ？電気は全てシャンティリアだつたり…。

ほんと金持ちだねえ、鼎さんは。

てかこの学校つて、もしかして財閥関係の人とかが居たりするのか
な。

金持ちが集まる所？

あたしめっちゃ一般市民ですけど…。いいの？

「セヒト…まあ行くか」

迷わなきゃいいけど…。

…

「ええー… 玄関は何処ですか？」

広すぎて玄関すら見つけられません。
あたしは今何処に立っているんでしょう。

「…迷った、完璧迷った。エーリヒよ、迷ひちやつたよー。」

誰かあああー！

誰も居ないよおおー！

「ビリしたじ良いんだうつ… これが やあ最悪さんと行けない…

無駄に広いんじゃボケえー！

トントンッ

後ろから肩を叩かれる音…。

「ん？」

心中はまるで…奥様は見た！…って感じだった…。

「君、今日転校して来たつて子？」

び 美形

何じゃ この人！！ 美形すぎる！！！

同じ人間！？

「あ……はい……」

「そつか、此所で何してんの？」

うおあつー！美形スマイルー！美しいー！

「えええつと... 理事長室に行きたいんですけど、広すぎて迷っちゃって...」

「じゃあ俺案内してあげるよ、ついて来て」

「えつ~ちゅう…」

案内！？してくれるの…？

何て優しい人なの！？

美形で優しいって今まで通つてた高校にはこんな人居なかつたよー…？

素敵だなあ…。

「…つてちゅうと待つて…」

あたしはあの美形君に急いでついて行つた。

【2】

あたしはとてもとても優しい美形に、理事長室まで案内してもらつていた。

中に入るとき處は……、
言い表せないくらい豪華。

うん、何だこれ。

玄関でも圧倒されたけど、廊下がこれつて。

ありえない。

慣れるまで時間かかりそうだなあ……。

「ねえ」

「はい！？」

びっくりした、突然話しかけてくるんだもん。

「お前何で黙つたの？」

「あ、上原由有です。」

「由有ね、呼び捨てしてもいい?」

「はー、いいですよ」

「うわあ……呼び捨てだつて。こんな美形に呼び捨てで呼ばれるつて、あつともつ一生ないよね。大事にしよ。」

「俺は^{かんなごく}神無郁、三年な」

「えつー、三年生だったのー?」

「あ、あ、よろしくな」

「ほつひじりがいじよりしへお願こしまかー。」

「ンな緊張すんなよ、仲良へじみうつな」

郁先輩の綺麗な手があたしの前に差し出される。

あたしはその手を握った。これからよろしくといつ意味を込めて強く。

「えっと… 郁先輩、聞いていいですか？」

「郁って呼んでよ、先輩要らない」

「いえいえっ！ 先輩なんで！ 呼び捨て出来ませんよ！ 郁先輩と呼びます」

「むう… 不満

あつ膨れつ面だ。
先輩可愛い。

「先輩… その顔可愛いです」

「はつ？」

「その膨れつ面ですよ。男の人には失礼だと思つたが、可愛いですね先輩は」

「……」

可愛いよ、先輩。好い人そうだし、仲良くなれて良かった!-

「…くえ…」

「先輩?どうしました?」

「ん?別に何でもないよ。行こつか

「あつはい!」

あたし達はまた歩き出した。

…

「「」の通路を真っ直ぐ行って右に曲がると、すぐ其処に理事長の廊下があるから、その中の理事長室つてどこ入ればいいよ」

「理事長の……廊下……？」

あたし達は他愛もない話をしながら此所に来て、また一層郁先輩と仲良くなつた気がした。

それは嬉しいんだけど……理事長の廊下つて何？

「全部理事長の部屋つて事」

「全部……」

全部ー?ちよつとちよつと扉さん、あなた何ですか。自分専用の廊下があるんですか。
凄すぎだよ……。

「それじゃあ、俺もう行くな

「あつあつがヒーヒーコモシタ!助かりました!」

「うん」

「今度お礼をせひやれ。」

せつかくこんな親切してくれたんだもん。
お礼しないことだよね。」

「お礼……じゃあ、わよつと
」

「えつ。」

何だろ……手招きしね。」

あたしはむちゅむちゅ」と先輩の前に移動した。

そしたら突然先輩が顔を近づかれて……って……えつ？

…あたしと郁先輩の唇が重なった。

「…お礼はいれでいいよ、由有利變すがだからキスしちゃった。それじゃね」

先輩はわたしの頭に手を乗せてから、来た道を戻つて行つた。

あたしは未だ放心状態…。

……「うん… 郁先輩今何したの?
えつと…えつと…え…。

ええええええ！－！－！－？？

今つ…今…！

キ…キスされたああああ－！－！
郁先輩とキスしたつ！－！
はつ！？意味分かんないし！何で！－！？？
ちよつと待つてよつ…！

理解不能…先輩つてあたしの事男だと思つてるよね。なのに何でキスするの！？先輩もしかして…いや…！それは考えたくない…！

でもでもーつ…！

てかあたしのファーストキス奪われた…！

ちゅうとおおおおおーーー！

「…先輩はあつち系なのか…ああ…嫌だ…結構信頼してたのに…あ
んな先輩嫌だよ…」

あたしはシラックすぎて其処からずつと動けずにいた…。

【3】

…あれから、どれくらい時間が経つただろ？。

あたしはそのまま放心状態になり、その場所に突っ立っていた。

れいきのがショックすぎて…もうどうしたらいいのか分からなくて…。

「はあ…」

ずっと此所に居ても仕方がない…理事長室に行こう。

あたしは重い足取りのまま理事長室へ向かった。

…

コンコンッ

乾いた音が響き、その後すぐに扉を開いた。

「失礼します」

扉を開け終えたら、突然体を抱き締められる感覚…。

「遅い由有ーー待つてたんだぞーー? 何してたんだよーー!」

「ああ…」めんざし、昂さん、ちょっと色々あつて…

「色々? てか顔色悪いぞ? 大丈夫か?」

「うん…」

あたしに抱きついてきたのは、昂さん。

この学校の理事長、兼あたしのお父さんの親友。

いつもいつもあたしに抱きついてくるから、結構つかつたりする。

「やつか、良かつた。どうだ?」この学校は、気に入ったか?」

「でかすぎだすぎ使いすぎ。トニーか理事長の廊下って何よ。しかもこんな豪華な学校にしちゃつてさ…」

「まああれだー！俺の趣味だなー。」

「変なの…」

あたしは一気に冷めた。

これからこの学校でやつていいかるか正直不安だ。

郁先輩も…何であんな事？信じられない…。

かつこ良このこと…美形なのにあれは無いでしょ。

男にキスつて。
おかしい。

「由有…へびうした？」

「あつ何でもない」

「なういいけど…この学校的説明するな

「うん……」

それからあたしはこの学校の事について色々聞いた。

ほんつとこの学校は凄いね。うん。

何か六階の校舎が3つもあって、生徒と教師、理事長の校舎が揃つてるらしい。

広い中庭も設備されてて、しかもふつーにお店が置いてあるんだって！！服の！！
どんだけ！？

さすが昂さん。さすがお金持ち学校。

財閥の人とかが沢山居て、全員お坊っちゃんなんだって。

てか一言で言つと、文句無しの学校だね。

そんな中であたしみたいな一般人が生活なんて大丈夫なんだろうか。

不安だよ……。

先輩の事もあるしや。

郁先輩… どうしてあんな事したんだろう…。

変人なのかな?

「説明はここまでだな。他に聞きたい事とかはあるか?」

「へへん、別に… あ、寮は?」

「心配するな、部屋は一人部屋にしておいたぞ」

「ほんと!…やつた!…!」

良かつたあ… 一番心配してたんだよね、寮が。

女の子だし? 一人部屋はまずいじゃん、色々と。

ほんと良かつたよ…。

「これから校舎を案内してあげたいんだが… 僕忙しくてなあ… どうすつかな」

「別にいいよ? 案内くら」

「迷うだろ？」

「うう……」

確かに迷う。現に迷つたしね、最初。

「……まあ今は職員室に行ければいいからー、電話で誰か呼ぶか

「えつ？ ちよつと……」

言つが早いが昴さんはポケットから携帯電話を取りだし、どこかにかけ始めた。

「ああ俺だ。転入生の案内役を誰かに頼みたいんだが……、そうか、分かった。じゃあよろしく頼む」

電話をし終えて、携帯をポケットに入れる。

「一体誰に電話したの？」

「今から寮長来るから、そいつに案内してもらひえな

「寮長？そつか…」

「ン」「ンッ

「来たな」

えつ！？早つ！？

「入れ」

昴さんの声を合図に、扉が開いた。

入つて来たのは…。

「失礼します」

「…」

「うわあ…！」これまた美少年だね！？

可愛い系？

「理事長、案内役なら前から書かれていた下セー」

「悪かったよ、雅希。^{まやき}でも早かったな」

「近くに居たから。あ、その子が例の転入生？」

「ああ、仲良くしてやつてな」

雅希と呼ばれた人は、あたしに視線を移した。

ひえつ目が合つたつ。

…綺麗な子だな…。

「芹沢雅希です。寮長やつてるんで、今日からよろしくな

「あつ上原由有ですー。」

「うん」

うわっほんとに可愛いー！

天使の微笑みやね…。

癒される…。

「校舎案内してあげる、行こう」

「は、はいっ」

「あー雅希、職員室に連れて行つてもいいえるか？」

「はー、分かつてますよ」

そしてあたし達は理事長室から出でていった。

…

「IRの学校見てどう思つた？」

「えつ……えつと……広いなあつて思いました」

「そりだよな、びっくつでしたでしょ」

「はい……あ、あの雅希……先輩？」

「あ、うん。三年だよ」

「じゃあ雅希先輩ですね、あたつ……俺の事は由有でいいです！」

「じゅあ由有？」

「はいっー」

「何か困った事とかがあつたら俺に相談してね、力になるから

「はいっー……ありがとひー」「やれこまますーー」

「うわあ！……何でいい人なんだろうーー」

「頼もしいな……。

「あつそれで寮についての説明何だけど」

「はい」

寮かー…不安だけどドキドキして、雅希先輩みたいな人が寮長なら
楽しいかなって思ってるんだよね。
実は。

「寮はあれだよ。見える?彼処に建つてゐる…」

ん?えつと…あの『トージャスな洋館みたいなやつですか?

あれが寮なの!?

ほんとどんだけ!?!??

「彼処に住むんですか!?

「うん、不満?」

「不満だなんてとてもとても…むしろ大満足ですっ…」

「良かった。で、寮は彼処でね、一階がみんなの憩いの場つて感じで、遊ぶのとか沢山あつて有意義な時間が過ごせるよ」

「へえー…」

「一階は一年の階で、二階は一年、四階は二年になつてゐる」

「成る程…」

「由有は一人部屋なんだよね？」

「はいっ」

「後で部屋案内するから。それと食堂なんだだけだ」

「食堂…」

「そうだよね。食堂普通あるよね。」

「また超豪華なんじやないの？」

「食堂はあれね

【4】

そう言つて指差した先にあったのは…。

寮ぐらいの大きさがあり、これまた超豪華な屋敷と言われてもおかしくない程の建物が建っていた…。

「……」

あ…あれが…食堂…？

あんなのが食堂なの？
あれが？

ちょっと…あんなでかくていいの？だつて、飯食べるだけだしじょ？
無駄にでかいって。

「由有へどうした？」

「あついえー！てか…あれが食堂つて凄くないですか？」

「そり？まあ少し大きいやね」

あー… そうか。要は感覚の問題なのね。あたしは一般人なんで…、成る程…。

「次に職員室案内してあげるね」

「はいっ」

はあー… 緊張する。

昨日の夜挨拶考えたけど… ちゃんと言えるかな。

新しいクラスか…。

頑張ろ…！

雅希先輩に連れられ、あたしは職員室へ向かった。

「此所が職員室だよ

雅希先輩に案内されて、結構距離があつたらしく時間がかかってしまつた。

「先輩案内ありがとうございました！」

「ううん、それじゃあまたね」

「はい……」

先輩は来た道を戻つて行つた。

あたしはそれを見送つてから、扉の方に振り向いて一つ深呼吸をした。

「…よし、行くかー！」

ノックをして、あたしは静かに扉を開けた。

「失礼します」

入ると先生達が一斉にあたしを見てきた。

「あ、おめでとうございます。」

「うええ…えつと…転入してきた上原由有です。担任の先生は…」

「ああ俺だ」

出てきたのは…めえっちゃ若いまたまた美形の男の人…！

えつ…！こんな若い人が先生やつてんの…？
もつとオヤジっぽい人が先生だと思つてた…！

「上原な？俺はーーAの担任の河口だ。よろしくな

「は、はーーよろしくお願ひします…！」

「おおつんじや あ教室行くか！」

「あ、はい」

あたし達は1-Aの教室に向かつた。

【5】

「さういやああんた、結構可愛い顔してんのな

「うええーー？」

教室に向かってる途中、河口先生がいきなり変な事聞いてきた。

な、何言い出すんだこの人ーーー

可愛いつてーーーはあーーー？

おかしいーーー。

「さういう奴は…危ないぞ？」

「危ないって何が…」

「気を付けるよ、襲われなによいこ、あにつら容赦ねえから

「はあ…」

「……（ほんとに分かつてんのか？）」

「…………」

どうこう事、襲われないようにして……何が？

てゆーか……可愛いつておかしくない？あたし男ですけど。ほんとは女だけど！

先生が生徒に、しかも男に可愛いって言つが？

郁先輩もだし……この学校は変人が多いのか？。

「着いたぞ」

「えつー！」

着いた。……じいが……A。

やばい……緊張するつ……！

ひえええ！……心臓バクバク！！

「俺が先に入るから、合図したら入つて来い」

「あ…はい」

てか…教室の中すつごい煩いんですけど。

男子の会話が聞こえる……。

そんな事を考へてゐると、先生が扉を開けた。

「おらお前等静かにしろ!! ホームルーム始めてぞ!!」

うわあ……静かになつた。

「今日は転入生が来るから！ ほら入つて！」

えつ！？？ええ！？？？

何この盛り上がり様は！！

入つづらこんですか〜〜〜

「静かにしりひ〜〜〜ガキじやねんだから〜〜〜」

しーん。

はえ！〜やつぱ先生凄いわ〜〜!
敵にしたくな〜〜。

つまり田つけられたくない。うん、先生最高。

「入つて来い」

はつ〜合図だ〜よしひ〜〜

あたしは意を決して中へと足を踏み入れた。

「...えつと、上原由有です。よろしくお願ひします」

悩みに悩んだ結果、挨拶はこんな簡単になつた。

だつて普通が良いよねやっぱ。

… てかね、みんながあたしを見て固まつてんのよ。

何故に？

ପ୍ରମାଣିତ କାନ୍ଦିଲାଙ୍କ ଅଧିକାରୀ

うわあああ
！！！

いきなり大声出さないで！！

「可愛」——！！！

「俺達ツイてんな！！！」

「神様ありがとうございます……！」

はい?ええと...何か可愛いとか聞こえるんですけど...空耳?

泣いてる人いるし！！

ありえない！！

「上原は親の都合でこの学校に来たんだ。みんな仲良くしてやつてなー」

うつ！！あたしが微妙かも！！
仲良く出来ないかもしれない！！

「んじゃ上原、席は窓側の一番後ろの彼処な

おおーー窓側で一番後ろって嬉しくない！？

ラッキー！！！

あたしは軽やかなステップで席へと向かった。

向かう途中、沢山視線を感じて何か嫌だつた。

絶対全員見てるよね！！？

何でよ！！！

あたしは視線を気にしながらも、何とか席に到着。

座つてもまだ視線を感じる…。

何さーー見ないでーー！

「…ん？」

前の席から視線を感じる…。ジーッと見られてる気がする。

「…あの…」

あたしは前の席の人に話しかけた。

「ん？ あつ！」めんなっ見ててー！」

「いや…いいけど…」

またこの人もイケメンだな…かつこ良い…。

赤い髪が似合つて、耳には沢山ピアスして超美形君。

「俺矢野雅つづーのーよろしくなーー！」

「は、はー！」

「……可愛いな、由有」

「へ？？」

「あいやーてか由布つて呼んじゃつたけどつ呼び捨ていい？」

ひえつ！そんな上田遣いしないでけよ、だい！
かつこ良すがるから！…

「全然いいです！…」

「良かつた。俺の事は雅つて呼んでね」

ううう…そんなかっこ良い顔で首傾げないで！
ドキドキものだから！…

でもこの学校つて…イケメン多いよね…。

今までイケメンしか見てないけど。

郁先輩も雅希先輩も雅も。みんなかっこ良いし。

あつ河口先生もかつこ良こもんね。

お坊ちゃん まだからか?

凄いねー。

こんないつぱい美形見た事ないし、ちょっと両親に感謝かな！

ちゃんとやつて行けるか不安だったけど、みんな優しそうだし良かつた！！

これから頑張るぞー！！！

【6】

先生の話を聞いて、授業が始まった。

最初は学活みたいな感じで、学校の事やこれから的事を話してた。

それで、今は休み時間。

絶つつつ対質問攻めになると思つてたのに、みんなあたしの所に来ない。

てかみんな教室に居ないんだよね。
何処行つたの？

「ねえ雅」

「ンあ？どうした？」

前の席で寝てた雅の背中を突つついて、あたしは聞いた。

「みんな何処行つたの？」

「ああ……廊下だろ」

「何故？みんなして？」

「うん、廊下に先輩達が居たんじゃない？」

雅は体を横にして、顔だけこっちに向けてきた。

「先輩達？何で先輩達が居るとみんな行っちゃうの？」

理解不能なんだけど……。

「そつか、由有來たばつかで知らないよな。あのな、今田の今の時間は……階段トコに先輩達が通るわけ。移動の為に」

「うんうん」

「その先輩達は学校の中で一番人気ある先輩達で、みんな大好きなのよ」

「……うん」

大好きって…男が男を?
余計理解出来んわ！！

「だからみんな先輩達見る為に廊下に行ってるってわけ。お分かり？」

「分かっただけど…先輩達ってそんな人気あるの？」

「まあな、俺は好きじゃないけど。だって郁先輩とかだし…」

「えー？」

郁：先輩？今郁先輩って言つた！？

「郁先輩！？！」

「うん、由有知つてんの？」

「知つてるつて言つた…朝学校来た時、理事長室まで案内してもら

つたんだ

それに…あたしのファーストキス奪つたし…。

今一番会いたくない人ナンバーワンなんだよね。

「へえー…」

あれ…何か雅の声が一段と低くなつた気がする…。
どしたんだろ。

「雅? どしたの?」

あたしは雅の顔を覗き込んだ。

わつ! 何か知らないけど怒つて…る?

何故!?

雅顔怖いよーーー!

ガラーツ

突然後ろの方の扉が開いた。

入つて来たのは…。

「りやまたイケメンだ！！

茶髪の髪が良く似合う人。

「あつ来たな葉月、おはよ」

雅が挨拶した彼は…「つち来てあたしの…隣に座った…！」

隣だつたのか…！

てか挨拶返そーよ…！

「ありや…何か不機嫌？葉月…」

葉月と呼ばれた人は、机に突つ伏して寝る体勢を取っていた。

「……階段ト「ハヤカワ」

「ああ… 郁先輩とか居ただろ?」

階段ト「… 濃そうだなあ。

郁先輩か…。

どんだけ人氣あるんだろ?…。

そんな人とキスしたつて言つたら、あたし殺されるかな…。

間違いなく殺されるね。

「ん… てかそいつ誰?」

茶髪君は突つ伏した体勢であたしを見てきた。

「あつ上原由有です! 今日転入して来ました! よろしくお願いします!」

今日何回目かの挨拶。

「ふうん…」

「え……それだけ?

あなたは挨拶してくれないの?

ちょっと……

「ああー……」めんな、葉月朝機嫌悪いからせ、昼頃になると機嫌直つてるからそしたら色々話してくれるよ

「そつか……」

悲しいね、何か……。

「葉月、挨拶だけしろよ。初対面なんだしさ」

雅の声に反応して、葉月君?がこっちを見てきた。

「……一ノ瀬葉月」

言ひて早々と寝に入ってしまった葉月。

「えー……、そういう態度取る訳ですか。そつかそつかあ……。

文句言いたいね。

一応初対面ですよ？

「一コツと笑う事は出来ないの?ねえ。

「葉田… やりハベビルニ言え」

「あついいよ雅、全然気にしてないしつ！」

気にしない。いや…気にしてます。

だって仲良くなりたいじゃんーー

友達欲しいじゃん！！

あたしの望みは友達が出来る事よ。

「『めんな』んな奴で。葉月は俺の友達なんだ。よひしくしてやつて」

「雅の友達だつたんだ！よろしくね葉月！！」

「うん...」

うわ！－可愛いね何か。

髪の毛弄りたいかも…。

犬っぽいよ君！－！

仲良く出来そうかなつ…。

雅とも友達になれそうだし、良かつた！－！－！

「由有…」

「えつ？」

今誰かに名前を呼ばれたような…誰？

「おわつ！－！」

雅が叫んだ。

声がした方向に目をやると…。

え？

郁先輩

何で此所に……てか教室入つて来てるし――！

କାନ୍ଦିଲ ପାତାଳ ଶାଖା ମୁଣ୍ଡିଲାଇ

【1】～大事件～

何か良く分かんないけど…！郁先輩がこっちに向かって来るよ…！
？？

嫌つ…！来ないで下さい…！

あたしは無意識に雅の袖を掴んだ。

「由有？」

「いい嫌…郁先輩…」

「由有…」

嫌なのに先輩は近づいて来るしー…！

またキスされちゃうの…？それは勘弁してぇ…！

「そんな怯えないでよ、由有。今は何もしないって」

信用出来ません……

早くじつに行つてよ～！！！

「…先輩、由有に何したんすか？」

「別に、お前には関係ないだろ?」

「あります。由有に何かしたらタダじゃおきませよ

うわあ……火花が散つてる氣がする。てか睨み合ひ怖ー……。

「ふうん……まあじつでもこいけど……由有

「ふえつ……は、はー……」

「あの時ははじめんな。ついで……由有が可愛かったから……」

「へえー?かわつ……可愛いって……それ男にまつ台詞ですかー?」

「可愛ければ可愛いくって言つだら?」

「だからって…」

可愛いなんて！！
照れるからっ！！

「あ、由有顔赤い」

「！」

あたしは咄嗟に顔を隠した。

嫌だあ！！見られたくない！！

こんなかつこ良い人に可愛いなんて言われたら誰だって赤くなるよ
!!

「せせつ可愛い」

また言つた！

「…苛められてる奴がすね…。

「……はあ……先輩、用が無いなら来ないで下さい。授業始まりますよ？」

「用なうあるよ。由布に会って来る事」

はあーーー？

何言つてんのこの人ーーー

そしたら突然腕を引っ張られた。

あたしは突然すぎて声が出なかつた。

いつの間にか体は郁先輩の腕の中へ…。

そして顔を近づけられ、耳元に先輩の唇が…。

「マジ可愛いで、由有。俺のものにしたい」

「まつーーー何言つてーーー」

言葉を遮られるように口を先輩の唇で塞がれた。

やつ……！キスしてんじゃん！！

「ソニシ……サツ……ン……」

逃げようとした手で先輩の体を押してもビクともしない。

「どうか頭を押さえられているから逃げられない。」

卷之三

「先ぱつ…ンんつ！」

言葉を発しようとしても、先輩の口でそれすら出来ない。

やばいって！

何か… クラクラするし…。

頭が朦朧としてきた時…先輩の舌があたしの口の中に入ってきた。

「ンッ！んんッ……！」

ちよつと待つてよーー！

無理だつてつ…！

「はつ…ンッ…」

先輩の舌があたしの口内を犯す。

それだけでもう…何も考えられなくて、頭が回らなくて…力が入らなくて…。

…逃げられない…あたしは…先輩から逃げられない。

そう思つた時…。

やつと先輩が離れてくれた。

「ハアツ…ハツ…」

今まで息が満足に出来なかつたあたしは、息を整えよつとする。

郁先輩はあたしの頬を撫で、優しい微笑みを向けた。

不覚にも…それにドキドキしてしまったんだ。

優しくあたしの頬を撫でる。

「…郁先輩…」

「…」めん、我慢出来なくて…。嫌だったよな、ごめん…」

「……」

何も言えない。

先輩のそんな優しい顔見たら…何も言えないよ…。

…とか、いつの間にか廊下は凄い人がいっぱい居て、今までのを見られたらしい。

雅と葉月は呆然とあたし達を見ていた。

は…恥ずかしい…。

「…それじゃあ、またね由有」

「え…」

郁先輩は金髪の綺麗な髪を靡なびかせて、教室を出て行った。

瞬間…あたしは腰が抜けてへなへなど床に座り込んだ。

「由有！？」

雅があたしの元へ駆け寄ってきた。

「由有！大丈夫か？」

雅があたしの顔を覗き込む。

「う…うん…」

「はあ…つたくあの工口魔神が。由有にあんな事するなんて…」

郁先輩…。

思い出すと顔が熱くなる。

何で先輩は…あたしにキスしたんだろう。

男のあたしに…。

この学校は一体何なの？

ただただ疑問だけが頭に浮かんでいた

…。

【2】

あたしはひたすら走った。髪が乱れてもそんなの気にせず走った。
疲れても走った。

止まってる時間が惜しかったから。

…向かう先は理事長室。

昴さんに聞きたい事があるんだ。

それは…この学校の事。

此所は一体何なんだ！？？？

…

「ハア…ハアツ…」

息を切らし、落ち着いて呼吸を整える。

「ふう…よしひ…」

あたしはノックもせずに勢いよく扉を開けた。

「鼎さんっ…！」

「おうわ…？…由布…？」

鼎さんは椅子に座つて机に置いてあるパソコンに向かって仕事をしていた…と思う。

この人が真面目に仕事をするか怪しいけど。

てか今はそんな事より…！

「昴さん！… 聞きたい事があるんですけど…」

「聞きたい事？」

あたしは扉を閉め、ズンズンと昴さんに向かって行った。

昴さんは少し引き戻み。

「えーっと… どうした？」

あたしはバンツと机に手を当てる。
そしたらめちゃ大きい音がした。

それにビクついてる昴さん…。

ええい！…大の大人がこれくらいでビビるな…！

「あの…」の学校はどういう場所何ですか…？男が男を襲うん
ですか…？？」

昴さんは田を丸くしたまま動かない。

けどあたしはお構い無しに話を続けた。

「！」の学校おかしいよ……狂つてゐつ……意味分かんないんだけど
！……」

あたしは段々涙目になつていいくのが分かつた。

「落ち着け由有……何があつたんだよつ……！」

焦つてあたしの肩に手を置いた後、宥めてくれた。

そのお陰で少し落ち着いたあたしは、昴さんに奥の部屋まで案内され、でかいソファーに座られた。

一人して向き合つ形でソファーに座る。

あたしは俯いたままだ。

「由有…何かあつたのか?」

「……郁先輩つて…知つてますか?」

「ああ、知つてるが…そいつがどうかしたのか?」

「あの人は…ホモなんですか?」

「は…?」

「ああもう…—昴さんひいてんじやん!—そりゃひくわ!—

あたしもひくし!—

でも聞かないと駄目だし!—

「ああ…襲われたのか?あいつはお気に入りの子にはすぐ襲う癖つ
いてるからな」

ん?今何て?

「鼎さん… それって…」

「この学校の半分以上はホモだ。勿論神無もな」

え……まじで？

まじなの？

この学校の半分以上がホモって……。

あり得ねえええ！――！

ホモなのか――みんなホモなのか――！

この学校はホモ学園なのかあああああ――！――！

「鼎さん――！」

勢いよくソファーから立ち上がり、一言。

「辞めます……」

こんな学校居たくない……

ホモなんて嫌だ……

あたしは普通の女の子なんだああ……

「落ち着け由有……とにかく落ち着くんだ……」

昴さんがあたしの両肩に手を置き、バンバン叩く。

い……痛いんですけど……。

でもこんな学校居たくないよ……

ホモだよ……？

男が男を襲うのだよ……？？あり得ないわざでしょ……。

ちょっと親……

大事な一人娘をこんな学校に通わせるな……。

てか昂さん……

「何でこんな学校にしたの……? こんな変な学校……昂さんの趣味……? やめてよまじで……あたし女だよ……? 殺す気ですか……? ？」

「落ち着くんだ由有……なっとにかく落ち着いてくれ……」

「落ち着けるかあああ……」

昂さんの手を払い、もつこつその事こんな部屋めちゃくちゃに壊してたかった。

てか学校を壊したいのです……! 暴れたいのです……!

「話を聞け由有……確かにこの学校はホモ学園だ……男が男を襲うのは日常茶飯事だ……」

「あり得ないし……」

「眞ひぢや えばみんなお前のようにかっこ可愛こ系が好きだー！」

言ひつけやうな……

しかもあたしみたいってーーそれじゃああたしはやばくないです
！？

だから郁先輩にキスされたのー？

嫌だよこんな学校ーーーーー！

「由有は女の子だ。ばれたらいやばい所じゃない。…学校の男共に、女が学園内に居ると知れたら…奴等は獸のように襲つてくるだろ」

獸…！…！

襲われる…！…！

「だがばれなきゃ良い。大丈夫だ、俺がいるから。安心しろ」

「出来るかっ！…！」

安心なんて出来ないよ…！

危険すぎるしつ…

嫌だあ…。

「うつ…襲われたくない…てかもう襲われたけど…」

「神無にか…あいつは手は早いが、選んだ奴は大事にするぞ?他の男共から守つてくれる」

昴さんはあたしの頭に手を乗せ、優しく撫でてくれた。

…またそんなかっこ良い顔で笑わないでよ。

もつ賣れたけど。

「守つてくれるって…あの人ガ一番危険なんだけど」

「今はなーとにかく…」

わしゃわしゃと頭を撫で、髪がめちゃくちゃになってしまった。

「ちよつ…」

「この学校で三年間やつていくには辛いだらうけど、由有の性格ならもう友達出来ただろ？寮長もいるし、大丈夫だ」

雅…葉月…雅希先輩…。

…そうだ。あたしは一人じゃないんだ。

大変だらうけど…嫌めっちゃ大変だらうけど…！

来た以上……。

楽しむしかないか。

どうにかなるよね、雅達いるし。うん、大丈夫だ…！

「 鳴さん… あたし… 頑張るから… 楽しむよ… ホモ学園がなんだ
つ… と来いだし… 」

あたしは胸を両手で握りしめ、鳴さんを見つめた。

「 改めて… よろしくお願ひします。 鳴さん」

「 ああ。『みんな由布、この学校に呼んで… でも楽しんでくれよ。
俺もいるし、何かあつたらすぐ』と言えな」

「 ありがとう鳴さん… 」

あたしは満面の笑顔を鳴さんに向けた。

鳴さんは顔を真っ赤にして、何故か鼻を押されている。

そんな事由は知らず、心の中で誓つたのだった。

まあ…楽しむか…

せっかく来たんだし…

ホモ学園でも…雅也葉月も雅希先輩もいるしつ…

エンジョイしよう…

あたしは両手を上に上げ、顔を綻ばせたのだった…。

【3】

授業が始まらないとしていたので、由有は理事長室を離れ、1-Aに続く廊下を歩いていた。

気分は何ともまあ微妙だが、やつてこくなかった。

「不安だけど……超不安だけビリ……」

頑張つて生活しよう。
うん。頑張れ自分。

「よし……」

両手に拳を作り、意気込んだ。

キーンローン……

「やがつーちゃん鳴ったじゅん……！」

次の授業が始まるチャイムが流れたので、由有は走って教室へと向かつた。

その姿を影から見ていた者には『づかず』……。

…

ガラーツ

「間に合つたああーー！」

「間に合つてないわつーー！」

「あいてー！」

白い何かが由有の額に命中した。

それは床に落ち……音を立てて真ん中から割れた。

「え……

恐る恐る黒板の方を見ると……。

世界史の先生がもう一本のチョークを持つてこいつらを睨んでいた。

ううわ……怒つてらつしゃる……。

やばい……。

「今まで何処で何してたんだ?ん?…言つてみろ。しかもお前転入生
だろ?転入早々遅刻とはい度胸じやないか」

「えっと…理事長室に行ってて遅くなりました…すいません…！」

きおつけをして先生に礼をする。

先生はため息をつくと、何かぼやいた。

「まあいい。今日は大目に見るとしよう」

「先生…」

「しかーしつ…」

ビシッと人差し指で指されてしまった。

人を指差しちゃいけないんですよ先生。

常識守りましょうね。

「次は無いからな。以上！座れ」

「はいっ！」

あたしは自分の席へと座った。

前に居た雅がこちらを向いて「それ」と話しかけてきた。

「理事長室に何しに行つたの？」

「ん？」この学校の仕組みを聞きにつ

「はえ？ 仕組み？」

「うん」

あたしは相槌を打ちながら教科書等を机に置いていく。

最後にノートを出し、そのまま広げた。

「ふーん…

雅はそれだけ言つと、前を向いて机に突つ伏してしまつた。

あたしはと聞つと…。

先生の話など聞かず、ただずつと外を眺めていた…。

隣の葉月も寝ている。

次はお昼だ！！
何あるのかなあ…。

と、由有は心弾んでいた……。

これから起じる事件など全く予想していなく……。

…

「広ーーーーー！」

由有は食堂に入るなり、こう叫んだ。

お昼休み、由有と雅と葉月の三人は食堂に来てお昼にしようとしていた。

食堂は外見はもの凄い豪華だったが、中はもっと凄かつた。

広すぎる敷地に、数えられない程の高級な机と椅子。

沢山のシェフ。

豪華な飾り付け。

全てが輝いていた。

由有の目にはそう映る。

雅と葉月はそんな思い全くしなかつたが。

「あつち座り。一度空いてるし」

雅が指差した先は、窓際の、丸い机に三個の椅子が並んだ所。
本当に一度よく空いていた。

「ああ！行こう！」

由有はさつとと行ってしまった。

後から一人も続く。

三人は椅子に座り、由有は机に掛けてある電子手帳のような物を見つめていた。

「なあ…これって何？」

「それで料理を注文するんだよ。好きなの押してな」

「すっごー…どんだけ…」

由有は料理を選び、どれも美味しそうだつたが一番好きな料理にした。

由有の好きな料理は丼もの。

だから親子丼を頼んだ。

「へえー、由有親子丼好きなのか。意外だな」

雅が言う。

確かに意外だね。

由有みみたいな細つ子が親子丼など。

「そっ？あつはい！一人も料理選んで！」

雅が受け取り、料理を選んでいく。

その後に葉月も選び、あとは料理を待つだけとなつた。

しかし待つ間も、三人の会話は尽きなかつた。

「雅は△型っぽいね。葉月なんて尚更だし」

「由有は○型っぽいよな。いかにもって感じ」

雅が意地悪っぽく笑つた。

「俺△型だけど、嘗めんなよ」

と親指を立て胸に当てる。

「意つ外ー！でも由有は犬みたいだからな。まあ分かる気がする」

「意味分かんねえよ」

由有が苦笑した。

雅は

「いいの」と言つて頬杖をついた。

そして由有を見つめる。

視線に気づいた由有は、雅の視線と自分の視線を絡ませる。

「何?」

「いや……」

一瞬下を向くと、またすぐ由有を見た。

「可愛いなって思つただけ

……は?

え? ちよつと待つて。

信じたくないけど……まさか……雅は……。

……ホモ？

顔が少し赤いのが何よりの証拠。

いやいや……無いでしょ。
雅に限つて。

あたしの勘違いだって。
絶対そう。

そうであって欲しい。

友達がホモは嫌すぎます！！

勘違いだと思おう。

思いましょう。

「何言つてんの…雅の馬鹿野郎！」

「はつ？馬鹿野郎つてお前…」

「馬鹿だろ？ 雅は」

突然隣からきつい突つ込みが入ってきた。

葉月が突つ込んだのだ。

今まで寝ていたのに、いつ起きたのよあなた。

ていうか良い突つ込みだね葉月。

つい笑っちゃう。

「あははっー！」

「えっ！？ 笑わないでよ由有！ーてか可愛いって冗談な！男に可愛い
いは無いだろ！」

あ…やつぱり雅はホモじゃなかつた。

良かつたあ…。

安心した。

「つーか葉月…！俺が馬鹿だと…？あり得ねえ事言つてんじやねえよつー！」

雅が葉月に怒つた。

しかし葉月は全く動じず、また寝に入つてしまつた。

「無視すんなつ…！」

雅が葉月に怒鳴り散らしていた時、料理が来た。

二人は料理が来たのに、まだ言い争つてる。

といふか雅が一方的に怒つてるんだけど。

『気づかないで全く』の一人は…。

「はあ……ちょっと二人共、料理来たよ?ねえ…」

「お前はこいつもやううつ態度だよなつ……何なんだよ……」

「すー……」

「まじで寝るんじゃねえーつ……！」

……放つといつ。

由有は割りばしを持ち、いただきますと手を合わせ料理を口に運ぼうとした時…。

「…………やあああああああ…………」「…………」

食堂内に黄色い歓声が飛び交つた。

【4】

由有は咄嗟に耳を塞いだ。

鼓膜が破れそうなくらいにでかい歓声。

「う、うるさすぎーーー！」

「な……何今の……っ」

雅に尋ねてみると、雅は心底嫌そうな顔をして食堂の出入口を見ていた。

あたしも視線を追つて出入口を見る。

見ると其処に居たのは……。

……小さな男の子。

小セニ男の子が歩いていた。

……あれは、誰だ？
小さこなあ。可愛いね。

何て思つてこると隣に座っていた葉月が口を開いた。

「…………何で会長がこんな所に居るんだよ」

ん？・会長？・会長？・？

え……あの小セニ男の子は会長なの？

会長……。

会長おおーーー！

「会長なの葉月！－あの人！－！」

「ああ、だから周りの奴等が凄い歓声上げてるだろ？」

「…え？どゆ事？」

確かにみんな会長見てさあもあさもあ言つてるけど。

それが…？

「そつこやあ話してなかつたな、由有に」

「えつ…」

何を？てか雅不機嫌ね。
それは会長のせいなの？

「生徒会あるだろ、」の学校こそ

「うん…」

雅が料理を食べながらあたしを見て話してくれる。

あたしも料理を食べる。

「生徒会つていうのは、要は人気者の集まりな訳。顔が良いつて事ね」

「はい？人気者の集まりで顔が良い？」

何じゃそらー！

「じゃあ会長は…一番人気あるつて事？」

「そう、だからみんなああやつて歓声上げてんの、分かつた？」

「う、うん…」

やつぱり雅不機嫌だ。

てか凄いな生徒会。

人気者の集まりって…、顔で選ばれるの？

それっておかしくない？

顔だけでしょ？

その人の能力とかそういうのは無しで？

よく成り立つね、そんなの。

変なのー…。

まああたしには関係ないけど、生徒会なんて。

あたし達は一言も喋らはずに黙々と料理を食べていた。

そしたらあたしの上に一つの影がかかった。

「ん? 何?」

上を見上げると、其処に居たのは……。

……か、会長ー？！？

小さな会長があたしの隣でニコニコ笑つてゐるだけ……。
何で！？

助けを求めるよつと雅達の方を見ると……。

……固まつてゐる。

ちよつとおもお……

助けてよ……

「……君が、由有？」

「えつ？やつですか？」

あたしの答えを聞いたら、会長は元気と笑ってそして……そして？

気づいたら会長の顔が近づいてきて、チコシヒカルの顔が耳に囁いた。

チユツ…?

チユツ…え…。

「由有…会えて嬉しい…！」

会長はあたしに飛びついてきて、抱き締めた。

あたしの思考は停止しました。

……何が起ったの？

一体何が……？

頭が真っ白になつてこると、前からガタンッと椅子を引く音がした。

「会長……何でいつんだよつ……由有から離れる……」

雅の怒鳴り声と……。

「会長、また問題起りますないでくれますか？」

葉月の冷静な声が聞こえた。

「何でえ？ 由有は俺のものだよ」

「こつ脳のものになつたんだよ……とかく由有から離れられて……！」

「嫌だよーだ！ベーつ」

「ガキかよお前はつ…」

……。

「由有～！～」

「だーつ…！…頭すりすりすんじやねーよ…！…」

……。

「はあ…会長、由有から離れてください。由有が固まってるじゃないですか」

「やうだやうつ…！」

「えー……由有？」

何かが視界に入る。

何か何。

『……チユツ』

さつきのが頭の中を回る。回る。あれは。

「…………あやあああああつ…………」

今度は由有の叫び声が食堂内を飛び交った。

「えつー…由有？」

由有の顔がみるみる内に赤くなつていいく。

「……い、今今今……キッ…キッスををーつ……」

「あ、うんー由有が可愛かつたからー駄目だった…？」

そう言つて頭を傾げて顔を覗いてくる会長は可愛くて…って……！

「駄目に決まつてますからー…いきなり何するんですか！…？ってか離れてくださいよーー！」

何故にあたしは会長にキスされなきゃいけないのよー！意味分かんないしつー！

あたしは必死に会長の体を引き剥がす。

ひさしごとくして、余長は洪々あたしから離れてくれた。

「何でつ何でこんな事するんですか！？？」

あたしは椅子から立ち上がり余長と距離を置く。

「何でつて言われてもなー……。由有が好きだからじや駄田っ！」

「すい……そんなの駄田に決まつてしますつ……行こつー雅葉月……」

あたしは顔を真っ赤にしながら歩き出した。

「あつおこ由有！？」

雅が急いで席を立つ。

それに続いて葉月もゆっくりと席を立つた。

しかし雅は歩みを止め、会長を見つめた。

「……今度由有に手を出したら、タダじゃおきませんから」

強く睨むと、会長は可笑しく笑って、雅を見た。

「それはこっちの台詞。あんたなんかに渡さないよ」

二人は睨み合つた。

火花がバチバチと散る。

しかしその睨み合いは、雅が視線を外した事で終わりを告げた。

三人が去っていく背中を見ながら会長は、ただ静かに呟く……。

「……由有は俺のものだよ、分かつてるよね……？」

……いつもと違う雰囲気を漂わせている会長を見た周りの生徒達は、一斉に息を呑んだ……。

【5】

「何で…何で…何で…。」

「何でキスなんかするんだああああ…！」

「ほんとによーつー！意味分かんねえよーあの会長めーーー！」

「あ…料理全部食つてねえじやん」

此所は教室へ続く廊下。

由有の叫びに、みんなが三人に注目する。

そんな事にも気づかず、由有はまた叫びまくる。

「会長のバカ野郎ーーー！」

「うわバカ！－会長なんて叫ぶなつーーー！」

咄嗟に雅が由有の口を塞ぐ。

「むむうーー？」

雅だつて叫んでなかつた！？

「しかも会長バカは言つなつー殺されるぞーーー？」

「んんーー？」

殺される？それどうこいつ意味？

てか……息出来んわーーーーーーー

「んんっ……んっ……」

あたしは力づくで雅の手を剥がそうとする。

あたしの気持ちに気づいたのか、雅が「ごめん」と言つて口から手を離した。

離した瞬間、思い切り息を吸つたり吐いたりする。

く……苦しかった……！

「はっ……で、何で殺されるの？」

あたしは息が整った所で、疑問に思った事を聞く。

「それは……。生徒会には全員、親衛隊つてのが付いてるんだ」

「親衛隊……？」

「つて……何？」

「まあ一種のファンクラブみたいなもんで。ほら、生徒会は人気者の集まりって言つただろ？だから普通にファンクラブとか出来ちゃう訳よ」

「ああ……成る程ね。で、だから殺されるつて事は……親衛隊の皆様につて事？」

「ああ。しかも会長の親衛隊は過激な奴が多いからなあ……。食堂で会長が由有に抱き着いた場面だつて見てただろうじ……つたくあの野郎は……全然考えてないよな……」

ふーん……親衛隊ねえ。

でも殺されるって大袈裟じゃない？
何も殺したりしないでしょさすがに。

要はイジメって訳ね。

別にあたしそんなの気にしないけど。

「だから由有。これからは一人で行動するなよな、絶対誰かと居る事。分かつたか？」

ガシッと両肩を掴まれ、顔を近づけてくる雅。

：うん。今はあなたが危険ね。

顔近いから。

あたしはコクンと頷いた。

「よしつーじゃあ教室戻るか！」

雅の掛け声で、あたし達は教室へと歩みを進めたのである。

親衛隊かあ…何か嫌なの敵に回しちゃったかも。

てか全て会長のせいなんだけどね。

何で抱き着いて来るかなあ。
しかもキスまで。

郁先輩に続いて会長にもキスされるとは思わなかつた。

てかあたし、変な人にばつかキスされてない?

郁先輩はホモ人間でしょ。会長は…。

：ホモなの？

ホモだよねえ……多分。

だからキスしたんだよね。

ほんと……まともな人は雅と葉月だけじゃないの？

昴さんは何でこんな学校にしたんだか。
呆れる……。

これから何もなければいいけど……。

あたしは雅と葉月の背中を見ながらいつ願つた……。

【1】～大戦争～

空が朱くなり、夕日が射し込んでくる時間……。

ある一室に、一人の男が居た。

「…………つだあああ！－くそつ－！」

ガシガシと頭を搔き、机にあつた紙をばらまいた。

男は椅子から立ち上がり、もの凄い剣幕である場所に向かった。

辿り着いた先は……。

生徒会室。

バンッ！

ノックも無しに男は歩みを進める。

そんな男の様子を楽しむかのように微笑んでいる男が約一名、前方で高級そうな椅子に座つてこる……もちろん余裕。

Jの学園内で一番権力を持つている男。

逆らえる者はまずいない。

同じ生徒会メンバーでも。

「郁う……ノックも無しに部屋に入っちゃ駄目じやん。常識だよ?」
れ

「煩い。それより聞きたい事あんだけど」

郁はいつもよりも低い声を出し、会長を睨み付ける。
人一人殺せそつなくらいの目付きで。

「今日の亜の時、由布にキスしたんだって?」

「うふ。 それが?」

「手出せないでくれる~あの子に

笑っているが、その笑みは黒いオーラを放っている為、決して機嫌
が良い訳ではない。

キレている。それももの凄く。

「郁だつて由有利に手出したじゃん。おあにこひでしょ」

会長は机の引き出しがから紙を一枚取り、郁に渡す。

「副会長……仕事」

「ひりせんてんじと笑い、仕事はもはや強制だった。

郁は心の中で、自分でそれよと思ったが、仕方がなくそれを受け取る。

郁は紙を一度見て、また会長を見る。

「……識しきどうせ本氣じやないんだろ? だつたら手引いてくれる?」

「本気だよ。… 郁のお気に入りに興味があるんだ。しかも… 由有可愛いし」

上田遣いで郁を見る識。

郁はその視線をいつざらつて避けると、識に背を向けた。

「… 親衛隊が動いたらしいけど、止めないの？」

親衛隊…。

ついに動き出してしまった。

識直属の。

識の親衛隊は過激な奴が多い。
狙つた獲物は逃さないのだ。
何をしてかすか分からぬ。

由有がどうなるか… 分からない。

識は郁の問いに楽しそうに微笑むと、告げた。

「好きにせりせとせばいいんだじゃない?」

「あんたの大事な由有が何をされたもいの?」

「良くないけど…今は何もしないでしょ。だつてこれから…あのイベントがあるから。まあ由有泣かせたなら黙つてないけど」

識の瞳が鋭さを増した。

「いつもの識ではないこの雰囲気。

醸し出しているオーラだけで相手を圧倒出来る程だ。

郁はいつもこんな識を見ているから怖くも何ともないけれど。

「あのイベント…か」

郁はため息混じりに呟いた。

「もちろん郁ちゃんは由有狙いでしょ?」

「どうかな……。あつじやあこねやつとくから、会話ももきひとと仕事じゆよ」

郁は紙をヒラヒラさせながら扉へと向かい、部屋から出でていった。

識は郁が出ていった扉を見つめる。

「逃げられた…。まあでもいつか、予想通りだし」

識は座っている椅子をぐるりと窓の方へ向けると、空を見上げた。

「…また来たのか。あれが…」

識は遠くを見ながら、静かに、呟いた…。

嵐が吹く、10秒前。

【2】

「雅さんっ！……それもう一度……！」

シユパツと右手を挙げ、雅に催促する由有。

場所は変わり、此所は由有の部屋。

とこう事は、寮の中であると言つ事。

寮の中に入った時、由有が驚いたのは言つまでもない。

寮に入つて由有の第一声が…。

「あり得ないあり得ないあり得ない……どんだけだよひょつと……」

……だ。

ついには呆れて何も言えなかつたらしい。

まあ何回も豪華な物見せられたら誰だつて呆れちやいますね。

ちなみに作者は呆れます。

あ、すいませんいきなりどうでもいい情報。

気にせず先をお読み下さい。

「だから、明日は大イベントがあるから授業は一回無いの。で、その大イベントの名前が……」

「……プリンセス強奪戦争??」

「そつプリンセス強奪戦争」

「ほんと変なネーミングだよ。誰が考えて…あ、会長か」

と独り言を仰つてゐるのは葉月で。

あたしはそのどいつかと思つイベントの始端にて頭を真っ白にしていた。

「プリンセス強奪戦争って言つのは、三年の生徒全員が一、二年の生徒全員の中で好意を持つてる奴を追いかけまわすって事で…えつと…」

「三年が一、一年の中で好きな奴を追つんだ。つまりプリンセスを捕まえるって事」

説明が出来ない雅に代わつて、葉月が説明する。

…ここでは…あたし達一年と一年が三年に追われるって事だよね？」

三年が好意を持つてる人が。

じゃあ追われる人は限られるじゃん。

一部しか楽しめなくない？いや、あたしは別に楽しまなくても良いんだけど。

平和が良いし。

てかプリンセスって男がかい。
キモいわねえ。

「んで、三年は捕まえた奴を自分の物にする為に、ネクタイを渡すんだ。学校側から寄付されたネクタイな。そのネクタイには自分の物を主張する為に必要な刺繡が入ってる。三年は刺繡が入ったネクタイを持つて追いかける訳で…」

「捕まつた後輩は、三年から貰つたネクタイを付けなきゃいけない。
それでカツプルが成立するんだけど」

「カツプル成立しちゃうの！？無理矢理ネクタイ付けられても
！！？？」

「ああ。だから逃げるんだよ。嫌な三年からな

うわあ…辛いはそれ。
三年怖くない？怖いよ。

あたし達必死で逃げなきゃ駄目じゃない？
捕まつたら一生そいつの物つて訳でしょ？

……ん？

「ねえ…ちょっと待って」

疑問が出るよね此所で。

「その自分の物の期限はいつまで？もしかして……」

「由有が思つてゐるような期限じゃねえよ？一生とか」

あ…そつか。
良かつた…。

「三年が卒業するまでな

長くない！？

奥へでしおつーーーー

可哀想だろ！！！

長文

今まだ5月の後半ですけどおー?

あたしだつたらその三年ぶつ

あたしたちたゞその三年ぶり倒してネクタイ取って独り身になるね

「でも毎回ラブolutionになるカツプル多いんだぜ？しかも捕まつた奴は安全だからな。捕まえた奴が人気者なら絶対」

え？ 雅さん…… それどういう意味？

「例えば生徒会の誰かに捕まつたとしよう。そいつの持つてたネク

タイを付けておけば、周りからは虜め等されない。したくても出来ないだろ? 何てつたつて生徒会メンバーがくれたネクタイだから。お分かり? 由有

「……権力がある奴からネクタイを貰えれば、他の奴は手出し出来ないって事?」

「そういう事……要は安全!」

「守られるって事だ」

葉月が嫌そうな表情でため息混じりにそう呟ついた。

「確かにそれは安全だ。

危なくないし、みんなホモならいつ誰かに狙われてもおかしくないし。

守られる……。

三年が卒業するまでだけど、結局カツブルになるんだから、いつまでも……。

ふうん。

迷惑なイベントだけど、安心するねそれは。

毎日楽しく過ごせるとわ。

でも……三年全員が権力ある訳じゃないじゃん？

みんなお坊っちゃんまだけど。

権力あるのって生徒会だけでしょ？

生徒会以外からネクタイ貰つても安全なの？

「ねえ……」

「うん？」

「生徒会以外からネクタイ貰つても安全？」

「ああー……まあな。三年つてほぼ全員権力あつて人気だから。しかも今年の三年はめちゃくちゃな」

「へえ……それはまた俺達にとつては嬉しい事で……。あつけど貰えな

い人達だって出でてくるよな?」

そうだよ。

誰からも好かれない人だつて居る訳で。
失礼だけど居るんでしょ?」

「普通に出でくるな。当たり前だけど。ただ明日一日平和で過いでせるけど」

「やうだよな…それからの学校生活がどうなるか分かんないけど…」

「ああ。だから微妙なイベントなんだよ。幸せになる人と不幸せになる人が必ず出でくるから」

「一、一年の中でも、三年に好意を持つてる奴だつて居るだろ? そいつから貰えなかつたら…」

「告白して断られたみたいだよな

「まあな

……うん。そうだよ。

このイベント……告白と一緒にだ。

好きな人からネクタイ貰わなかつたら、もう自分に眼中ないつて思
うじやん。

貰えたら幸せだよね。

好きな人とカップルになれるんだもん。

何か……切ないね。

イベントが終わつた時にさ、好きな人が他の男子とくつついてたら
嫌だよね。

あたしだつたら嫌だ。

もしあたしに好きな人が居て、その人が他の誰かとカップルになつ
たら……。

……
て。

バカじゃない？あたし。

本気で考えるなつつーの！もしつて言つか、あたしは好きな人要らないから！

てかこの学校内で好きな人出来たら凄いね！！！
みんなホモなのにさ！！

出来たらうける〜！〜

「……な、なあ葉月……由有が……怖い……」

「いつもと様子が違うな…笑ってるけど不気味だ…」

一人が小声でこんな事を言つていたなんて知る由もなく、由有はいつまでも不気味な笑いを浮かべていたそうな……。

「由ゆ、有！」

「ん?何、雅」

堪らず雅は由有に呼び掛けた。

だって怖いんだもんっ！－！

「あ…明日だけ－！絶対に俺達から離れるなよ…－分かったな！？」

「へ…？何で？」

「それは…（こいつ…自分が狙われる獲物だつて分かってねえな？）

「

「俺達…友達だろ？由有」

「「え？…」「

「友達なんだから一緒に居るのは当たり前だ。違うか？」

「いや…違わない…けど…」

……葉月……キャラ違つ……。
変……。

……やだ！……不気味！……キショイ！……！

「…………」

葉月さん……キャラ壊れています。

誰ですかあなた。

「（だつてこうしないと由有聞いてくれないだろ？天然ぽいし。自分のかわらが変わるのは嫌だけど、仕方ないよな？）」

何でいう葉月の心の喰きなどもちろん知らない一人は、それから葉月に話しかけられなかつたそつだ。

だつて葉月ずっとここにこじてるから……。
怖いんだもん（由有、雅の心情）

「…あつだけどさ雅！」

「ん？ なあに由有」

「俺は転入してきたからイベントの事分かつてないけど、雅達は妙に詳しいよな！ 何で？ もしかしてこのイベントって4月とかにあつた訳？」

「あー…違つよ。」この学校が小、中、高一貫なのは知つてるよな？」

「知らない… そつなの？」

「知らなかつたのか…！ てかそつなのね？ 小学校の時はさすがに無かつたけど、中学校の時はあつたからさ…。辛かつたなあ… ほんと…」

あ… 雅が遠くを見つめてるよ。
よつほど大変だつたんだなあ。

「そつか…。だからなんだ…」

プリンセス強奪戦争かあ……。

無事終わると良いな。

どうが無事に終わりますよひつ……。

由有は顔の前で手を合わせ、心の中でめづちや願った。

……神様は、由有の願いを聞いてくれるのか……。

それは明日になつてみないと分からぬ…………。

【2】（後書き）

説明長かつたですね…。しかし次回は話が大きく動く予定…です。

【3】

まだ微かに涼しい季節。

そんな中で……由有は今、ものつつつ凄い暑さを感じてこます……！

「三年共ーーーマイネクタイは持つたあーーー？」

「…………」「うーーーすつ…………」「…………」

「じゃあプリンセス強奪戦争のルールを説明するなつーーー！」

と、何だか暑苦しい始まり方をした彼…聖光輝学園の会長。

名前は…昨日雅から教えてもらつたんだけど。

「ううんと…なんだつナ???

「今年も盛つ上がるなあ。識先輩の挨拶は

「ああ、ちくが識先輩だよな

おおーーーちくが識だよーーー

識ーーー

ありがとう生徒Aと生徒B！！

「はあ～あー！始まつまつよつー！」

隣に立っていた雅が、腕を上に伸ばして大きく伸びをした。

「眠……す……」

またまた隣に立っていた葉月が、立つたまま寝てるー？
器用なお兄さんだ事…。

てか寝顔可愛いなあ…睫毛長つー！
葉月つて女顔だよね。

……つてかあたし何してんの！？
何葉月を観察なんかしちゃってんのよー！
変態かい自分ー！キモいわキモいー！

「…………で、三年共はネクタイ持つてー、二年を追つかけまわして
くださあいー！ー、一年は捕まつたら最後ー！捕まえた三年のもの
になつてねー！」

ああ…あたしやばいな。

この学校に来てから変態チックが身に付いたよつな…。

違うー！あたしは絶対に此所に染まらないんだからっー！

「後はみんな去年もやつてるから知ってるよね？じゃあ始めるよー！」

「

「うわー！…来たー！」

「まずはピストルの合図にー、一年が校舎内を駆け回りてくださいー！グラウンドも良いからねー！隠れるのも有りーで、15分後に三年が追いかけるから、そしたら戦争の始まりだあー！」

「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」

「うわー！…むさーいー！」

始まっちゃうのかー…。

最悪だあ…。

あたしは追いかけられないよね？

大丈夫だよね？

何か不安になつてきた…。

「み…雅…」

怖くなり、咄嗟に雅の袖を引っ張る。

「ん？ どうした由有」

「……一緒に居てね？」

「あれ。何か段々と雅の顔が赤くなつてくれ……。
どうしたんだ？」

「雅ー？ 顔赤いけど、どうしたの？」

由有が雅の顔を覗き込む。雅は数秒固まつていたが、一瞬だけ目を見開いて……。

「ひ……！ おおおー一緒に居てやるよっ……！」

「うそっ……！」

良かつたあ！ これで安心だよ！

「……葉月……ほんとあいつ天然で分かつてねーよ……」

雅は寝てこる葉月の肩に手を置いて……泣いていた……。

「じゃあピストル鳴らすよーーー！みんな準備はいい？行つくよーーー！」

識は右手にピストルを持ち、撃つ用意をする。そして……。

「よーい…スタート…！」

パンという音で、一斉に一、二年達が体育館を走り出した。

「うわっちょ……」

みんなの気合に、由有は呑み込まれそうになる。

少しふうつにしてしまった。

「由有！…俺達も行くぞ…！」

平常に戻った雅が、由有の手を引き走り出す。葉月も一人に続いて走り出した。

「ねえ雅！！これから何処行くのー！？」

周りの煩い音にかき消されないよう、由有は大声で雅に聞く。

雅も由有の声に気づいて、振り向く。

「とにかく走るーー！」

「ええーー？」

雅の言う通りに、三人は広い校舎内を他の生徒と一緒に走り続けた。

これから三人はどうなってしまうのか…。

まだ戦争は始まつたばかり……。

【4】

「葉月……あと何分?」

「あと…一分」

「一分か…すぐだな。由有、走つっぱなしだったけど大丈夫か?」

「う…うん…」

本当はめちゃくちゃ苦しいけど…!
三年怖いし休んでりんじゃないよ…!!

「あと一分だけ…?」

「ああ…無事終わるといいけどな…」

「お昼に終わるんだよね?長いよお…四時間もあるじゃん…」

このイベントは、一日使つけどお昼までだ。
午後から自由時間になり、休んだり出来る。
でもそれまでが長いんだよ…。
耐えられるかな自分…。

すると突然、地震のような振動がやってきた。

「えつ…何?」この揺れ…」

「はあ…始まつたな」

「えつ…始まつちやつたの!…?」

嘘…! もう…! ? やばつ…! 怖い…!

段々揺れは酷くなつていき…本格的に揺れ始めた。

「うおつ」

「ああー来た。葉月、これからどうする?此所も時間が経てばすぐ
に見つかるけど」

「確かにな…。もう少し経つたら移動するか」

あたし達は今、あまり人が来ないと言われている場所…職員が使つ
校舎の一一番端の教室に居る。
此所は今のトコ安全らしい。
しかし時間が経てばとても危険な場所。
何故なら此所は、追い詰められたらもう逃げられないから。
一番端つてこいつのが厄介なんだよね。

言ひやれば何処の校舎も全部安全ではない。

「一年は本当に恐怖に怯える。

「あつ！彼処の人達捕まつてゐる…！」

窓から由有が指差した先には、泣きながら三年に捕まつてゐる一年の姿。

哀れだ…。怖いよ三年。

「可哀想に…。しかもあの三年共有名な小崎達じやん。あの一年の笑みは無くなるな、これから先」

ええ…そんな怖い事言わないでよ雅。
あたしとか捕まつたらどうすんの?
めちゃ危険よ？

女だし、何されるか分かんないよ。

いや、追われるって決まつた訳じゃないけど。
不安だし…。

「雅…」

「ん？どうしたんだよ由有。不安か？」

雅が由有の頭に手を乗せ、優しく撫でてくれる。

それがとても安心するんだ。
雅の手も。笑顔も。

「大丈夫だ由有。お前に何かあつても、俺達が絶対に守つてやるから

「え？」

「ちゃんと安全な場所に置いてやる。だからそんな顔するな、由有」

葉月……。一人共……。

…嬉しい。不安が消えていくよ。
二人の言葉は凄く安心する。
だからもう怖くない。
雅と葉月が居る。
だから大丈夫……。

「うん……。ありがとう、雅…葉月」

泣きそうになるのを堪えて、あたしは笑った。

一人も笑って、何だか暖かい気持ちになつたんだ。

「 「 「 ! ! ? 」 」

突然教室の扉が開いて、あたしは心臓が飛び出しそうになつたまま、開けられた方へと振り向いた。

一人も同じ。

其処に居たのは……。

「やつぱり此所に居た」

「……何でこの場所に居るつて分かつたんすか？」

威嚇するような雅の問いかに、彼は苦笑して雅を見た。

「由有の場所なら何処でも分かるし」

「なつ……何言つてんですか！ ! 会長……」

会長……。

扉にもたれかかるように、会長が其処に立つてた。

なんだか…。

あたしがこの時、どうしようもない不安に駆られたんだ…。

その原因は…。段々と強くなつてくる地震のような振動。

もつあたしが、これからどうなるのか、全く予想出来なかつたんだ。

【5】

「ねえ由有」

「は、はいっ」

会長がにこやかな王子様スマイルで話しかけてきた。
ほんつといつ見ても可愛らしい人だ、天使の微笑みだよ。

「郁に会った？」

「えっ？ 郁先輩ですか？ いえ… 会つてませんけど… どうしてですか？」

「うんにゃ？ 会つてなかつたら良いんだ。 ……とここで三人共」

会長は順番にあたし達を見る。そして…。

「早く逃げた方がいいよ？」

「「「はつ…？」」

三人の声が綺麗なくらいにハモった。

しかしあたしの頭は数秒機能停止した。

会長の言葉をすぐ理解出来なくて……でも雅と葉月は……。

「まじかよ……もう来たわけ？」

はあ、と雅が深くて長いため息を吐いた。

「なら行くか…捕まつたら最後だしな」

だるやうに垂つ葉月。

えつと…まだ理解出来ないんですけど…何を監督さん垂つてこらのか
しり…

教えて下さこ…!!

「なら由有はいっか」

グイッと力強く前へ引っ張られ、そのまま会長の腕の中へ…え…?
何故に会長の腕の中に入らなきゃいけないの…?
こっちの方が理解出来ないよつ…!!

「お~い会長…!何してんだよつ…!由有放せつて…!」

「そ、そりですよ…!何でこきなりこん

「あいつらはお前達が狙いだから。そん中に由有一人だけ放置は可哀想だろ?だから俺が貰つてやるよ」

あたしの言葉は会長の台詞に遮られて、理解出来ない言葉達を並べる会長は、…意地悪そうな笑みを浮かべていた。

「じゃ、そういう事だから。またね」

それだけ告げると、あたしの手を引っ張つて廊下に出される。それと同時にもう一つの扉から、沢山の男子が…わんさか教室に入つていった。

え…これって…。

「　　矢野—！—！—！」

「　　一ノ瀬—！—！—！」

色々な種類の男達が教室に入つていった。
それはもう凄い速さで。

しかもめちゃ多い。

ちゅつと待つて、これはまさか…。

「　　うわああああ！—！—！」

一人の叫び声が聞こえる。とても苦しそうな…助けてあげたくなる

ような声。

あたしはすぐに理解した。この男達はみんな、雅と葉月が狙いなんだ。

だから会長はあたしを避難させたのか。

それは嬉しいけども……。一人がとてもとても可哀想よ？

「やめろっ！－くつくな！－でかどこ触つてんだよ……！」

「くそったれ！殺されたいのかよお前達は！－放せ！－！」

ああ……一人が捕まってしまう。

助けたいけどあたし一人じゃどうにもならないよ。

こんな中に入つていきたくないし……。

「大丈夫だよ、二人は」

「え……？」

大丈夫？何を根拠に？

こんな酷い状況なのに？

「そんな落ち込んだ顔するなよ」

優しくあたしの頭を撫でてくれて、微笑んでる会長はとても綺麗だった。

あたしとした事が…魅とれてしまったのよ。
あまりにも会長が綺麗だったから。

今…分かつたかもしねない。
会長が一番の理由。

優しいし、会長から漂つてくるオーラみたいなものが他の人と全然違う。

きっとこの人は……凄すぎる人だ。

あたしじゃ想像もつかない程に。

だから…会長になったのもしれない。

みんなから愛されたから、だからこの人は……。

「由有？俺に魅とれてんの？可愛いなあもう」

会長の顔がゆっくりと近づいてきて、でも由有は全くその事に気づかず、そのまま…。

「…ん！？んっ…！」

なっ…何で会長にキスされてんの自分…！
魅とれてたあたしが馬鹿だつた…！
だつて会長綺麗だつたから…！

由有が頭の中で葛藤していると、少し開いた唇の隙間から、会長の舌が入ってきた。
咄嗟にあたしは会長の服を握る。

会長は角度を変えて、もつと奥まで入り込んできた。あたしはその度に吐息が溢れて…。

逃げられなくなっていた。

「かい…つふ…ん…」

やばい…こんな…流れちゃ駄目だつて…!
逃げないと…つ。

「つ…せあつ…つ…」

ガリッ

あたしは会長の唇を噛んだ。

会長は眉間に皺を寄せ、ゆつくつとあたしから離れる。

苦笑しながら自分の唇を拭う。

「ひどいよ由有、歯噛むなんて」

「なつ…会長がこんな事するからでしょー!？」

顔を真っ赤にしながらひしゃべりでもじつこもならなによ自分…。

「顔真っ赤だよ、由有。可愛いなあ…」

愛しいものを見るような瞳で見つめられると……。

余計赤くなるつーの！――

「やめてください――か会長の方が可愛いですから――」

これほんと。絶対に会長の方が可愛いから。
あたしなんかより。

「何言つてゐるの？俺は由有の方が可愛いこと違うよ。だからさ……由有

突然会長の顔が真剣な表情に変わった。
あたしは無意識に背筋を伸ばしてしまつ。

「……俺のネクタイ、貰つて？」

「え……？」

会長の……ネクタイ?
何で……何であたしが?
えつ……
どうこうつ事よ――!

由有。ついに狩られる時間がやつてきてしまつた。

【6】（前書き）

何だか久しぶりの投稿ですか？私にはとても久しぶりのよつに感じます。というか、久々に“愛を。君を。”を執筆いたしました。はい。やっと調子が戻ってきたので、執筆する事が出来ました。またよろしくお願ひします。

普通に学校で友達作つて、普通に授業を受けて、楽しい楽しい高校生活を送る予定だつたんだけど……。

神様は意地悪だよね

由有は今、会長から言われた一言が理解出来ずに固まってしまつていた。

國語：たまたま田舎に
近づいてきている会長に田舎は全く気づかないで、田を開いたまま
硬直状態をし続ける。

由有の頭の中は、会長に言われた言葉を理解するのに必死だつた。

会長のネクタイを……あたしか貰うの？

分かんないから……会長に聞く……

「か、僕は…おまえが…?」

（左は余地との距離は30センチを基準で）

のだから、自業自得と言うのだろうか。

曲有はあたふたしてしまし、また近いへしてぐる会長を制止出来なかつた。

いつしか由有は、後ろの壁に押さえつけられていた。

「会長つー、何つ……」

「由有……」

耳元で甘い声を囁かれた由有の体は、ビクンと肩を震わせた。顔も徐々に赤くなつていき、会長の空気にもうやられてしまつた。

其処から逃げ出す事は、不可能に近いだらう。

会長を取り巻く空氣……オーラは、人を魅了するもの。逆らえる人はいない。

いや……逆らおうとする人はいない。

この学園の中には……ただ一人を除いて。

「離して下さい!! てか突き飛ばしますよー?」

「あつその台詞由有には似合わない。突き飛ばすなんて言わないで……もつところ、別の……」

「だああああーーー! どうでもいいから離れて下さいーーー! ! ! !

本当に限界だつた。

こんな美しい顔が目の前に迫つてくれば、誰だつて離れたくなる。離れたい。

由有は渾身の力を振り絞つて、自分よりも小さい体を無理矢理引き剥がした。

しかし体は自分より小さくても、会長は男。

力の差は歴然である。

一旦は引き剥がしたが、また壁に押さえつけられて、綺麗に元に戻つてしまつた。

「つ…………！」

「観念しなよ、由有ちゃん」

由有にはこの囁きが、悪魔の囁きに聞こえた。
本当に悪魔の囁きなのだが。

強く目を瞑り、助けを呼んだ。

そんな可哀想な由有に神様は同情したのか、なんと助けが来てくれたのだ。

しかし、その眼には（）来た人物は、おまけにも意外な人物で……

「……何やつてんの？」

「……あ、邪魔が入った」

誰かの声によつて、会長が落胆の声を漏らした。

会長はゆきくりと声の人物に振り向く。

卷之二十一

「た

助かつた……。

由布の心の声は、またにそれだった。

【6】（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。みなへつとですが、徐々に投稿していきたいと思います。

では、また次回でお会いしましょう。

【二】（前書き）

ものすごい久々の投稿です！本当に久々です！！前回の投稿から何日も経っていますね～。本当は早く投稿したかったんですけど、上手いかず……（涙）ですが…これからはきちんと早く投稿をつ！！……いえ、絶対に亀並の遅さです。次の投稿はまた久々になると思います。ですが見捨てないで頑張りますので、どうかよろしくお願いします m(—)m

【7】

天からの授かり物だ……。

由有の思考は、イッちゃつてた。

それに誰も気づかないで、話は進む。

「識……何やつてんのさ。何で由有襲つてんの?」

「はああ……雅希には関係ないだろ? 邪魔だからどっか行ってくれる?」

会長は心底嫌そうなため息を吐くと、シッシッと虫でも追い払うような手の動作をした。

しかし雅希はどこにも行かない。
むしろ一人に近づいてきた。

「何なのさ……」

識はまた盛大なため息を吐くと、由有から離れて雅希と向き合った。雅希は自分よりも低い識を睨んで、識も識で身長に負けないくらいに思い切り雅希を睨む。

二人の視線が痛い程にぶつかり、由有は心なしか体を震わせた。
それくらい二人の睨み合いは凄かつた。

直視出来ないくらいに。

「識、由有から離れる」

「何で? 雅希には関係ないじゃん」

「識の考える事なんてまるわかりだから。だから離れる」

「いーや

……なんだろ？この光景。一人が小さい子供のよつた口ゲンカをしてるよ。

止めた方がいいのか悪いのか。
さつきの睨み合いはどうこへ行つた。

「ちょっと会長、雅希先輩……」

やつぱり止めようと考へた由有なのだが、由有の声にも一人は気づかないで口論を続けている。

「ねえ……」

「識は男なら誰でもいいんだろ？ だつたら由有に近づかないでくれる？ ネクタイだつて他の奴にあげればいいだろ」

「由有の事は本気なの。本気で奪うから」

奪つ！？ 意味分かんないよ会長！？

「またそんな事言つて……」

「雅希には分かんないよ。だから手出せないで」

そう言つて識は由有に向き直そつとしたのだが、……。
それを雅希は許さなかつた。

識の腕を掴んで、由有から遠ざける。

そしてそのまま小柄な体を窓の方に吹っ飛ばした。

ガニッと嫌な音がする。

識が窓ガラスに思いきり体をぶつけたのだ。
とても痛そう。

でも識は余裕そうな笑みを浮かべるだけだった。

「はれ……。痛くないの？」

つい口に出してしまった。だつてあんなに強く体をぶつけたのに、痛い顔一つしないから……。

「雅希。俺にこんな事してタダで済むと思つてんの？」

「……」

雅希先輩は無言。

でも鋭く会長を睨み付ける。

今までの雅希先輩からは想像も出来ないくらいの表情だ。
会長はゆっくりと腰を上げると、雅希先輩を睨み付け、そして可笑しそうに笑つた。

ていうか……。

雅希先輩ってこんな事する人だったの？

人驚掴みにして放り投げて、めっちゃ怖い顔で睨んで。
何か……イメージが……。

「さあて……と。どうじよつか？」

コラリと、会長が動いた。まずい！　あの体勢はもしかして……。
戦闘体勢つてやつですか！？
まずいよーーー！　まさかケンカしちゃうのあなた達！ーーーやめてえええつーーー！

「ちょっと二人共ーー！　話せば分かるつてーー！　だからケンカはーー！」

「ーーー！」

次の瞬間。

由有の目の前はスローモーションで流れた。

いや、本当はスローモーションで流れてないのだが。由有にはそう

見えた。

生のケンカ。殴り合い。

尋常じゃない動き。殴る音。

やばい……やばいやばいやばい……

ほんとにケンカなんかしてんだよ馬鹿野郎――――

何でケンカなんかしてんだよ馬鹿野郎――――
今すぐ止めろっ！――

……つて、叫びたいけど叫べない。

小心者の由有ちゃん。

二人に圧倒されて叫べないんです。

このつ役立たず！――

つて自分自身に突っ込んじゃつたり。

ああ――マジで止める方法考えないと。

てかこの一人マジ切れしてない？ 雅希先輩の顔は怒ってる顔して
るから本気怖いし、会長なんか笑ってるけどその笑いが黒いから怖
いし。

もう何なんだこいつら。

ぶつちやけ何なのよ。

何でケンカすんの。

こっちの事も考える。

てかあたしもキレそう……。拳作ってそれがフルフル震えてるから。

本当に……一人は……。

「すう――、はあ――。すう――、……お前等あああああ――
――、いい加減うざいからまじ止め……っ」

ポチッ

は？

ポチッ……？ 今ポチッて音がした。ポチッて……。……何？

ガチャンッ！

「え
.....?
」

なんか……地面が無くなる感じが？
しかもガチャン？ ガチャンって何？

落下落下落下——！！！

落ちてるからああああ——！！！！

意味分かんないし——！！！！

「誰かああああああああ……」
「……」「……」

由有が開いた地面に落ちていった。…………。
識と雅希は、ただただ呆然と由有が落ちていった方を見つめてるだけだった……。

【二】（後書き）

うわあ……。微妙な終わりになつひやこましたね、これ。由有はど
うなるんだろう？ 次回をお楽しみに！ ですね。一応話は決ま
つてるので、頑張つて執筆します！ では次回もよろしくお願
いします。また次回でお会いしましちょう（^ - ^）~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4643c/>

愛を。君を。

2010年10月10日06時08分発行